
キュアグラス ～ただ雑草のように～

プシェミスル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

キュアグラス　　くただ雑草のように

【Nコード】

N5548Z

【作者名】

プシエミスル

【あらすじ】

あてもなく、たださすらいながら戦い続ける一人の女がいた。人から好かれず、また彼女も好かれようとはしない。彼女は一体何を望むのだろうか。その名はキュアグラス。雑草という名のプリキュア……。

プロローグ

「わ．．．わかりましたあ！もう、二度としませんから命だけはあゝゝ！！」

「本当ね。もし今度繰り返したなら、その命を．．．。」

「ほ．．．本当ですってばゝゝゝ！！！」

私が今問いただしているのは、あるスーパーマーケットから万引きをしようとした少年だ。偶然それを見た私は少年に『ある程度』制裁を加え、万引きを未然に防いだ。彼も二度としないと誓った。本当かどうかは疑わしいが．．．。

私の名前は芝草秋香^{しばくさ しゅうか}。歳は15、中3だ。我が家は転勤が多い家で、ほぼ1年ごとに転校を繰り返している。だから私には友人がいない。友人をつくる気もない。親から友人をつくれと言われているが、正直うつとしい。つくってもすぐに疎遠になってしまうのなら、そんなものはいらない。

そんな私は現在、四つ葉町という町に住んでいる。別名クローバータウンと呼ばれているそうだが、私にはどうでもいい事だ。

今日は日曜日、私はとぼとぼと町を散策している。でかい怪物が跋扈している以外は何とも平穏な町だ。．．．ん？でかい怪物？

人物紹介

芝草 秋香（しばくさ しゅつか）

1996年7月21日生 15歳

両親と自分の3人家族

明るくて社交的な他のプリキュアたちと違い、あくまで孤独を貫き、誰とも関わろうとしない少女。口数も少なく、つい毒を吐いて周りに嫌悪感を与える。

プロローグ（後書き）

四つ葉町で出会った4人のプリキュア。キュアグラスとして共に戦ったものの、秋香は彼女たちとは関わろうとしない。己は雑草、雑草なのだから。

次回「孤高」 奴とは、絶対に関わらないほうがよい。

孤高

四つ葉町を襲っている巨大な怪物。それに立ち向かっているのは、私と同じ年代であるう4人の女。その奇怪な容姿。あの女たちも私と同じ『プリキュア』なの・・・かな。

「エエエエエエエイ!!!!!!」

巨大なツインテールをした金髪の女が、怪物に向かって飛び膝蹴りをかます。それに続いて他の女たちも攻撃する。

『プリキュア・クアドラブル・キーーーーッッッック!!!!!!』

4人の息の合ったキックが怪物にダメージを与える。だけど怪物にはさほど効果は無いみたいだ。逆にその圧倒的な力で女たちを圧倒する。

・・・たく、せつかくの日曜日をこんなつまない事で潰さないで頂戴。

『チェンジ・ザ・キュアグラス!』

服のポケットから、変身アイテム『グラス・ロッド』を出して、私はあいつらと同じプリキュアへと変身する。

『我は無限の生命の証、キュアグラス!!』

・・・雑草とは生っても生っても生えてくるもの。だから無限の生

命なのだ。

「・・・・・・・・ツツ!!」

バツシーーーーーン!!!

「ウオオオオオオ!!!!!」

私は無言で怪物にパンチをお見舞いしてやる。急所に当たったのか、怪物が地面に倒れた打ち回る。

「た・・・・助かったあ・・・・。」

「もたもたするな、もう立ち上がってるぞ。」

「え？」

ベシツツ!!!!!!

警告した時にはもう遅かった。怪物はもう立ち上がり、ツインテールの女を殴り飛ばした。

「ピーチ!大丈夫!？」

へそを出した女と赤い服の女がピーチと呼ばれた女に駆け寄る。隙を見せたらだめだってのに。

「私がやるしかないか。」

私はロッドを装備し、自らの技を発動させる。

『地上に生える無数の草の魂よ、奴にからみつき、動きを封じよ。』

『プリキュア・グリーングラス・ロープ!』

ロッドの先から草で編んだロープが放たれ、怪物の体をごんじがらめにし、動きを封じさせる。

「動きが止まった・・・?」

「何もたついてるの?止めを刺せ。」

「・・・う、うん!」

ピーチとその他の連中も、必殺技を繰り出した。

「クローバーボックスよ!私たちに力を貸して!」

「プリキュアフォーメーション!レディ・・・ゴー!」

「ハピネスリーフ、パイン!」

「プラスワン、フレアーリーフ、ベリー!」

「プラスワン、エスポワールリーフ、ピーチ!」

「プラスワン、ラブリーリーフ……!」

「ラッキークローバー・グランドファイナー!!!」

大きなクローバーマークが怪物を結晶で封じ込める。

ハ
ア
ア
ア
ア
ア
ア
ア
ア
ア
ア
・
・
・
・
・
・
! ! ! ! !

「

」

怪物は徐々に弱っていく、やがて浄化されたのか消滅した。

おいおい、もう昼過ぎじゃない。1日の半分が終わった。つまんない事に関わるんじゃない。さ、散歩の続きといこうかな。

「待って！」

変身を解き、元に戻った奴らの1人、キャンディの包みみたいな髪型をした子が来る。

「さつきはありがとう。あなたがいなかったらどうなってたか。あ、あなたもプリキュアなの？」

• • • • •

私は無視して散歩に向かう。こいつらを相手する道理なんて無いから。

「私、桃園ラブ！あなたは？」

くどいなあ。私は歩んでいた足を止め、後に振り返る。そして・・・。

「ッー!!」

バキィッッ!!

「タッハアア!!!」

ラブと名乗った子の顔面を、思いっきり殴り飛ばした。

「ラブ!」

「ラブちゃん!」

「ラブ、大丈夫!？」

「う・・・うん何とか・・・。」

「ちょっとあんた!何て事するのよ!!」

「今すぐラブに謝って!!」

青い髪をしたモデル風の子と藍色の髪の子が突っかかってきた。面倒な連中だ。

「私、馴れ馴れしい人間は嫌いな。だから殴ったの。」

「な・・・何よその態度!!」

「初対面の人間にそこまで親しくする義理は無いわ。そうでしょう。」

「……あんだ……!!!!」

「……………」

言いたい事は言った。呆氣にとられている奴らを背に、私は散歩の続きに入る。無駄な体力を使った。

「……何なのよあいつ、人を助けておいてあの態度は……!!」

「それに一言も謝らないでおいで。今度合ったら……。」

「ラブちゃん、鼻血が!」

「こ……これ位大丈夫……だよ。」

明くる月曜日、私は今度転入する『公立四つ葉中学校』の門をくぐった。クラスは3年の4組目。

「今日からこの4組に転入した、芝草秋香さんだ。」

紹介をされ、席につかせられる。クラスメートから質問はされたが、適当にあしらってやった。

「転入生？」

「3年の芝草秋香さんですって。」

「どんな人だろう。ねえせつな、見に行ってみようよ！」

「ちょ、ちょっとラブ待って！」

「あ、あの人かな？・・・て。」

「あ・・・あいつ！昨日ラブを殴り飛ばした・・・！」

「え・・・そうだけ？顔良く見ていなかったからわかんないなあ。」

「ラブ、あまりあいつには関わらないほうがいいわ。」

「そ・・・そうかなあ。」

「顔も全然笑っていないし、一言もしゃべろうとしないじゃない。放っておきましょう。」

「で・・・でも・・・。」

同じプリキュアなのにとラブは言おうとしたが、せつなに引っぱられ、言えなかった。

「どうせまた転校するんだもの。」

自分に言い聞かせるように、私はつぶやいた。

孤高（後書き）

学校に転入した秋香に関わろうとするラブ。軽くあしらってやる秋香。

いまの彼女には、ラブはしつこく付きまとうシラミでしかなかった。

次回「憎い奴」しかし、それでも女は興味を持たれる。

憎い奴

ポカポカポカ・・・

昼休みになった。私は学校の校庭の木陰でゆっくり昼寝だ。ここならば誰も来る事は無いだろうし、落ち着いて眠れる。

クー・・・クー・・・

今日もいい天気だ。毎日こんな日が続くといいが・・・。

「・・・ささーん・・・。」

？

「・・・ばくささーん。」

?????

「芝草さーん！」

・・・何だ昨日私がぶん殴った、ラブ・・・とか言っ子だったっけ？

「何しに来たの？」

「芝草さんが1人でどこかに行くから、つい心配になっちゃって、ついて来たの。」

「戻って。」

「どうして？」

「私今昼寝中なの。邪魔しないで。」

「でも……。」

「戻って。」

「……うん。」

……

そう言う、ラブはとぼとぼ戻っていった。

「昼寝の続きね。」

私は再び眠りこける。

「……」

「どうしたのラブ？ボーっとして。」

「……何でもない。」

「そう……。」

今のラブには、せつなという子の言葉も入ってこないようだ。

放課後になった。私はクラブ活動を何もしていない。ただまっすぐ家路につく。

「・・・・・・・・・・・・・・・・ふう。」

私はため息をつく。その時だった。

「芝草さん！」

またラブが来た。今日はやたらと絡んでくるな。

「帰りにドーナツ食べていかない？」

「いない。」

「そんなつれない事言わないで行こうよ。」

「くどいわね！いないわ！」

「嫌だと言っても連れて行きます！」

一体どこからこんな力が出るのか。ラブは私を引きずって行った。抵抗を試みたがラブの力が上だった。

たどり着いたのは1台のバンの前だった。屋台のドーナツショップか。ふうん、案外小洒落たお店ね。あら？先客がいるみたい。

「ラブちゃん？それにその人……。」

「あーっ！あんた昨日ラブを殴った人じゃない!!」

バンの前の簡易テーブルに座っていたのは、昨日怪物と戦っていた子たちだった。まずいわね、こいつらと関わると面倒な事になるわ。さっさと退散しましょ。

「この人も、ドーナツが食べたいって言うから仕方なく連れてきちゃった。」

ちよつと！私そんな事一言も言っていないわ!!

「……帰らせてもらっわ。」

退散しようとしたが、すぐにラブに捕まった。抵抗しようとしたけれど無駄だった。諦めて私は相手する事にした。はあ……帰りたい。

テーブルの上に5人前のドーナツが並べられた。皆おいしそうに食べている。私は全く手を付けない。付ける気もない。

「どうしたの芝草さん。食べないの？」

「食べない。」

「おいしいのに。」

「おいしくても。」

「食べたら幸せになるのに。」

「もう充分幸せよ。」

「嘘だよ、だって顔が笑ってないもん。」

「幸せだったら笑ってなきゃいけないの？」

「……………」

ラブは黙り込む。やっと諦めてくれたか。

「ねえ、芝草……さん？」

おとなしそうな茶色の短髪の子が聞いてきた。仕方なく相手してやる。

「あなたの名前は何て言うの？」

「……………秋香。芝草秋香。」

「秋香さん……。いい名前ね。」

「褒めても何も出ないわ。」

「私は祈里。山吹祈里です。」

「覚えておくわ。」

「歳は？」

「15。中3。」

「じゃあ私たちより1個上級生なのね。」

「そうね。」

そこまで言うと、今度は綺麗なモデル風の長髪の子が質問してくる。

「芝草秋香さんだったわね。私は蒼乃美希、よろしくね。」

「……………」

「家族は？」

「両親と私。」

「友達は？」

「いない。」

「い、いらないうて・・・。」

「友達なんて、つくつてもいずれば嫌いあつか、忘却の彼方よ。」

「・・・昨日私たちが戦っている時に、あなたが援護してくれた。どうやらあなたもプリキュアみたいね。あなたの力、かなりのものだと思うの。」

「それが？」

「私たちに協力してくれない？」

「断る。」

「どうして？」

「馴れ合うのは嫌いだから。」

「な、馴れ合うって・・・。」

「それに。」

「それに？」

「1人のほうが、かえって好都合だから。」

「・・・・・・そう。」

「そう。」

「……………ねえ、秋香さん。」

「何？」

「昨日から見ているけど。あなたって、氷みたいな人ね。」

「氷？」

「そう、温かみの無い冷え切った氷のようだね。」

「……違うわ。私は雑草、どこにでも生えてどこにでも邪魔になる雑草よ。」

「雑草？」

「そう、雑草。」

……………

そこで会話は途切れた。

「もういいでしょ、私帰るわ。忙しいから。」

ドーナツに全く手を付けず、私は家路につく。

数百m離れた時、ラブがこっちに向かって大きな声を出した。

「秋香さぁーん！困った事があつたらいつでも来ていいからねー」

「!!!!!!」

困った事なんて無い。

ようやく家に戻れた。日はもう沈んでいた。

ガチャリ

「ただいま。」

家に入っても誰もいない。両親は共働きで、いつも帰って来るのが遅い。

モグモグ

夕飯はいつも1人だ。静寂の中での夕飯は落ち着く。その後お風呂を入れて、洗濯物をたたんで、お風呂に入って、寝る。これが私の日課だ。

Z Z

明日も学校だ。寝坊すると思いからさっさと寝よ。

憎い奴（後書き）

相変わらず突っかかってくるラブ。何故彼女はそこまで過剰なのだろう？

そして何故か秋香は、他の子たちの面前に立たされていた。苛立ちながら。。。

次回「紹介」もう何遍も言ってきた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5548z/>

キュアグラス ～ただ雑草のように～

2011年12月19日23時03分発行